オーディオ実験室収載

TruPhase の活用(8)
—音源の位相確認(8)—

１．はじめに

TruPhase の位相反転機能を利用して音源の位相確認を行っていますが、前報(7)に引き続き CD の位相確認を行います。

２．TruPhase の位相反転機能による音源の位相確認計画

前報(6)と同様、前報(1)と同じ経路で CD の位相確認を行いつつ、バッハの CD を聴いていきます。

CD ドライブ→fidata HFAS1-S10→Brooklyn DAC+→TruPhase
→300B シングルアンプ

試聴した CD 音源は、音源の位相チェック実験(26)で使用したバッハのヴァイオリンの作品で下記のとおりです。

MERCURY (DECCA) SSHRS-011/014
J.S.Bach　無伴奏チェロ組曲全曲
ヤノーシュ・シュタルケル

EMI TOCE-8641-42
J.S.Bach　無伴奏チェロ組曲全曲
ムスティスラフ・ロストロポヴィッチ

Deutsche Grammophon(ユニヴァーサルミュージック) POCG10243/4
J.S.Bach　無伴奏チェロ組曲全曲
ミッシャ・マイスキー

３．TruPase の位相反転機能による音源の位相確認結果

上記 CD について、Brooklyn DAC+での位相反転と TruPhase での位相反転の結果が同じになるかどうかが焦点です。

音量調整を容易にするため、Brooklyn DAC+では位相反転させず、TruPhase で位相反転させた状態で TruPhase のヴォリュームを固定し、TruPhase での位相反転では、Brooklyn DAC+でのヴォリュームでの調整だけにしました。

そして、Brooklyn DAC+では位相反転させないで、TruPhase での位相反転有り無しで聴いていきます。

シュタルケル盤は、位相反転させますと音像が大きくなりすぎ、定位が曖昧になります。位相反転させないと、定位がしっかりして、ステレオサウンド社がマスターテープから新たにリ

マスターしたものだけあって、フレッシュな音でシュタルケルのオーソドックスな演奏が把握できます。
ロストロポヴィッチ盤は、位相反転させますと音像が過大になり、定位が曖昧になります。位相反転させないと、定位がしっかりして、ロストロポヴィッチの豪快なボウイングが楽しめます。
マイスキー盤は、位相反転させますと音像が過大になり、定位が曖昧になります。位相反転させないと、定位がしっかりして、いかにもマイスキーらしい独自の解釈の自由闊達な演奏であることが分ります。

4. まとめ

TruPhase での位相反転と Brooklyn DAC+での位相反転の結果は、音源の位相チェック実験(26)と同様の傾向になることが分りました。

以上